

国際課活動レポート



◆スペイン・ガリシア州青少年交流派遣（3月4日～13日）

和歌山県とスペイン・ガリシア州はともに世界遺産である「熊野古道」と「サンティアゴの巡礼路」を有し、1998年に姉妹道提携を結んで以来、様々な分野での交流を行っており、2010年からは青少年代表団の派遣・受入を行っています。

今年は3月4日（日）～13日（火）、15名の青少年がガリシア州を訪問しました。

世界遺産であるサンティアゴ・デ・コンポステーラ旧市街に滞在し、大聖堂、巡礼博物館、民族博物館で歴史や文化を学びました。ガリシア州の最西端、“地の果て”と呼ばれ、巡礼路の最終目的地ともされるフィニステレ岬を1時間ほど歩き、巡礼路を知ることができました。サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学で和歌山県のことを英語で紹介したり、座談会をしたり、また、3泊4日のホームステイを経験する中で、言葉の壁を超えた交流を行うことができました。

◆駐日アルゼンチン大使来県（4月14日）

日本とアルゼンチンの外交関係樹立120周年を記念し、アラン・ペロー駐日アルゼンチン共和国特命全権大使が来県され仁坂知事を表敬訪問されました。

ペロー大使は移民された方々や在アルゼンチン和歌山県人会の存在等、和歌山県とアルゼンチンが特別な繋がりを持っていることから、今後はこの繋がり为基础にしてビジネス交流や人材交流を拡大することの重要性について述べられました。

仁坂知事は、世界的に有名な旅行ガイドブック「ロンリープラネット」において紀伊半島が世界の観光地で第5位に選出されたことをうけて、アルゼンチンからの誘客にも取り組んでいることを紹介しました。



異文化体験記

◎和歌山県職員による「異文化体験記」です。

皆さん、こんにちは。私は中国山東師範大学にて研修中の川口喜寛と申します。中国の生活において、私が一番驚いたことは、QRコードを利用した決済がとても普及していることです。今回は、中国のQRコード決済について、ご紹介します。

中国のQRコード決済には、ウィチャット（wechat：微信）とアリペイ（Alipay：支付宝）というスマートフォンのアプリを使用します。「アプリで支払い（決済）をする」と聞いた場合、クレジットカードのような事後の口座引落としやプリペイドカードのような現金のチャージといった支払方法を思い浮かべるかもしれませんが、中国では、そのウィチャットやアリペイというアプリを使用して、店側のQRコードを読み込んだり、自分のQRコードをスマートフォンに表示して店側に読み込んでもらうだけで支払いが完了します。支払う前に、アプリと自分の銀行口座をあらかじめ連結させておくので、QRコードを読み込んだり、読みませたりした段階で、口座から利用代金が引き落とされるので、現金のチャージする必要はありません。支払った代金は、すぐにアプリを通じて通知が来るため、その場で金額の確認もできます。支払い時に、現金を出す必要がなく、スマートフォンのQRコードを立ち上げて、読み込んだり、読みませたりするだけの作業ため、とても簡単に利用できます。

レストランなどでQRコード決済が利用できるのはもちろんのこと、スーパーマーケット、ホテル、タクシー、公共料金、現金のやり取りが当たり前だと思われていた屋台の支払いにも利用することができ、日常生活のほぼ全ての部分で、その利用ができます。2017年に日本銀行が発表した調査レポートでは、その利用率は、98.3%と記されました。中国は、すでに世界最大の電子決済市場といわれており、キャッシュレス化が進んでいます。

そこまで普及が進んだ背景には、クレジットカードなどの決済システムの普及率の低さ、QRコード決済の設備投資に係る店舗側の負担の低さ、急速なスマートフォンの普及、利用者側にとっての簡易性など様々な理由があるといわれています。



また、近年の日本への中国旅行客の増加を受けて、日本でもアリペイによるQRコード決済ができるようになってきました。中国旅行客が頻りに訪れる空港や都市部の百貨店、家電量販店などで既に導入が進み、最近では、地方のローソンやJTBの提携するホテルや飲食店でも導入され始めるなど、中国のQRコード決済の普及は、日本全国にも広がっています。

日本におけるQRコード決済は、「LINE Pay」「楽天ペイ」「Origami Pay」が代表的なサービスとなっています。これらのアプリによるサービスが始まったのは、ここ1、2年ですが、日本でも徐々にQRコード決済を利用できる環境は整ってきています。とくに、【LINE Pay】における日本の登録ユーザー数が3,000万人を突破していることを考えると、今度、ますます、QRコード決済の利用環境は、整備されていくのではないのでしょうか。先進国の中では突出した現金大国の日本ですが、キャッシュレス化が進んでいく可能性は大いにあると思います。

〈川口喜寛（平成29年9月より中国山東師範大学にて研修中）〉

文化紹介 ◎黄中国語国際交流員による文化紹介です。

『中国の宅配便』

私はよくアマゾンで買い物をします。平日家にいないので、いつも時間を指定して配達してもらいます。そして、荷物はいつも指定した時間内に届きます。最初はとても不思議に思っていました。こんな時間通りに配達するのは大変ですからね。

最近、中国ではネットショッピングの影響で宅配便の利用が進んできました。でも、日本の宅配便とはちょっと違います。今日は中国の宅配便について紹介したいと思います。

中国では宅配便は自分の家まで配達されることは少ないので、多くの人は届け先を自分の職場にします。仕事中に受付まで荷物を受取りに行くのはごく当たり前のことです。届け先を自宅にした場合でも、自宅までは配達してもらえず、マンションであればマンションの一階入り口か守衛室まで取りに行くのが一般的です。宅配業者は、事前に荷物のラベルに記入した電話番号に電話して、「あと5分着きますから、〇〇までに受取りに来て下さい。」というような感じで配達しています。宅配業者がお金を出して作ったロッカーが住宅地域にたくさん設置されています。例えば、注文者が当日荷物の受取りができないとき、宅配業者は荷物を宅配ロッカーに預け、暗証番号などをメッセージで注文者に送ります。あとは注文者が都合のいい時、ロッカーまで荷物を取りに行けば受取れます。



大学生もネットショッピングの重要な顧客となっています。どの大学でも1日何十～何百もの荷物が届きます。



個々人に配るのはとても大変ですので、配達業者が考えた方法は、校門か、校門近くの場所に荷物をばら撒き、学生がそこへ取りに来るよう電話で連絡します。今では多くの大学では“宅配便受取り室”が設置され、一旦そこで荷物を預かり、担当者が学生に連絡します。

農村部では村と村が離れている場合が多いので、各村まで配達するのは無理なことです。そこで多くの宅配業者は、農村間の中心となっているスーパーなどに荷物を預け、村の人たちがそこへ荷物を取りに行くようになっていきます。その預かり料として1回1～2元(1元は約17円)を取られますが、最近は預かり料を無料にするスーパーも増えてきました。荷物を受取りに行くとき、ついでに買い物する人が多いからです。

ゲストコラム

◎和歌山県は全国有数の移住母県です。当県から海外への移住は明治初期から始まり、その数は全国第6位で、中南米や北米などの渡航先では、移住者やその子弟により和歌山県人会が結成されています。今回はパラグアイにある和歌山県人会の子弟が当県を訪れました。

(以下、パラグアイ出身の松宮淳さんの感想文を抜粋)

.....
『祖父の和歌山』

(滞在：2018年 1月 26日 - 2018年 2月 16日)

1月30日に和歌山大学へ行って、プレゼンテーションをして、生徒たちといっしょに昼ごはんを食べ、大学を見学しました。僕にとって初めての日本語でのプレゼンテーションで、パラグアイの観光地などについて話しました。

2月2日、祖父の故郷の湯浅町に行きました。その日は祖父が通っていた耐久高校へ行きました。湯浅はとても古い町ですが、すごくきれいで、町長さんに会って祖父が日本を出た頃の昔の話を聞きました。湯浅醤油で醤油の作り方を教わりました。隣の広川町の「いなむらの火の館」にも行き、濱口悟陵さんの偉業について学びました。耐久高校は悟陵さんが作った学校で、和歌山県初の県議会議長だと祖父が言っていたのを思い出しました。世界津波の日は 1854 年に広村に津波が来た日だそうです。高野山では、はじめて雪の積もった景色を見ました。パラグアイでは雪が降りません。一年に2～3日霜の降りる日があるだけです。白い雪と赤いお堂がとてもきれいでした。

10日はWIXASでグローバルセミナーがあり、パラグアイについてのプレゼンテーションをしました。クイズや来てくれた方達と話しをしました。楽しかったです。13日には那賀高校へ行きました。ここで生徒と昼食を食べながら話しました。午後からはプレゼンテーションをしました。15日に仁坂知事、県議会の方々の表敬をしました。



皆様ほんとうに3週間お世話になり、勉強になりました。すごくいい思い出になりました。皆様のおかげで楽しい日を過ごしました。どうもありがとうございました。